

強者の戦略

英語から学ぶ1「思索のアルバム（2）」

Wittgenstein が自らの本を“really only an album”（真の意味で単なるアルバムである）と述べたことの真意を追究するためには、どうやら「本」や「アルバム」の辞書的な定義に頼ってはいけません。それでは、今回は Wittgenstein 自身の記述から「アルバム」という語の意味を探ってみたいと思います。

Wittgenstein は“Thus this book is really only an album.”と結論付けるまでに3つのパラグラフを要しています。序文ということもあり、1つ1つの文は内容的にも構造的にはそれほど難解ではありません。1文ずつ内容を確認してゆきましょう。なお、本稿は強者を志す中学・高校生を対象にしたものなので、哲学的議論としての正確さよりも高校英文法の領域と大学受験レベルの語彙レベルを逸脱しない範囲で話を進めてゆくことを予めご承知置き下さい。

【第1パラグラフ1文目】

The thoughts which I publish in what follows are the precipitate of philosophical investigations which have occupied me for the last sixteen years.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

関係詞節が複数含まれているため複雑になっていますが、文全体の構造は“The thoughts(s) ... are(v) the precipitate(o) of ...”の第2文型となります。全体を訳すと次のようになります（なお、和訳は全て池吉によるものです）。

【第1パラグラフ1文目 和訳例】

以下に私が発表する思索は、この16年の間私の頭を占めてきた哲学的探究の結果生じた沈殿物のようなものである。

この文の補語もまた、字義通りに受け取るのではなく precipitate（沈殿物）という語から連想される性質を帯びていると解釈するのが良いでしょう。「沈殿物のようなもの」と比喩的に訳したのはそのためです。ちなみに、沈殿物とは液体中の混じり物が底に沈んで溜まったもののことで、この意味から肯定的なイメージを読み取ることはできそうにありません。

【第1パラグラフ2文目】

They concern many subjects: the concepts of meaning, of understanding, of a proposition, of logic, the foundations of mathematics, states of consciousness, and other things.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

強者の戦略

2 文目の文法的な注意点としては、They の指示対象が何かということ、そしてコロン (:) 以下に続く subjects の具体例の並列関係をどのように捉えるかが挙げられます。They の指示対象は前文の主語である「思索」(The thoughts) と考えるべきでしょう。「the precipitate はどうですか?」と聞かれれば、それは全くの誤りというわけではありませんが(第2文型なので S=C となります)、補語は主語の性質を表すものなので指示対象としては主語を挙げるのが妥当でしょう。コロン以下の部分については、of meaning から of logic までの4つの「of+名詞」は the concepts に掛かっている、「the concepts of ...」と「the foundation of mathematics」、「states of consciousness」が並列になっていると考えるのが無難でしょう。他の解釈が不可能とは言いませんが、この箇所複雑な読み込みをする必然性が感じられないので、シンプルな解釈で行きたいと思います。

【第1パラグラフ2文目 和訳例】

その思索は様々な主題に関係している。意味の概念、命題の概念、論理の概念、数学の基礎、意識の状態、等々。

これらの主題を見ても、どのような議論なのか具体的なイメージが湧きにくいかもしれません。Wittgenstein についての予備知識がある人ならそれぞれの主題について「ああ、あれね」と思い当たりニヤリとできたのかもしれませんが...

【第1パラグラフ3文目】

I have written down all these thoughts as *remarks*, short paragraphs, of which there is sometimes a fairly long chain about the same subject, while I sometimes make a sudden change, jumping from one topic to another.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

remarks がイタリック体になっているのでこの語が重要ワードであることが分かります。of which 以下の関係詞節の領域をどこまでにするかは悩みどころでしょう。subject のところでコンマ (,) があるのでそこで止めても良さそうですが、直後の接続詞 while をはさんで対比関係 (long chain about the same subject と a sudden change) が成り立っていること、関係詞節が始まったら文末まで関係詞節だと割り切った方がシンプルだという個人的考えから、以下の和訳例では文末までを関係詞節として解釈しています。

【第1パラグラフ3文目 和訳例】

私はこれらの思索全てを注記として書き留めてきた。その注記は短い節であるが、その中には、同じ主題について一続きのかなり長い注記もあるが、その一方で、突然主題を変化させ、ある話題から別の話題へと飛躍するものもある。

remark は英和辞典では「(短めの) 所見、意見」が第一義に挙げられているものが多いですが、訳例ではそれよりも掲載ランクの低い「注記」という訳語を充てています。邦訳版でも構わないので一度『哲学探究』

強者の戦略

を手にとってもらえると分かると思いますが、Wittgenstein による remark はふと思いついてサッとメモ書きした程度の長さのものが少なくありません。

【第1パラグラフ4文目】

—It was my intention at first to bring all this together in a book whose form I pictured differently at different times.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

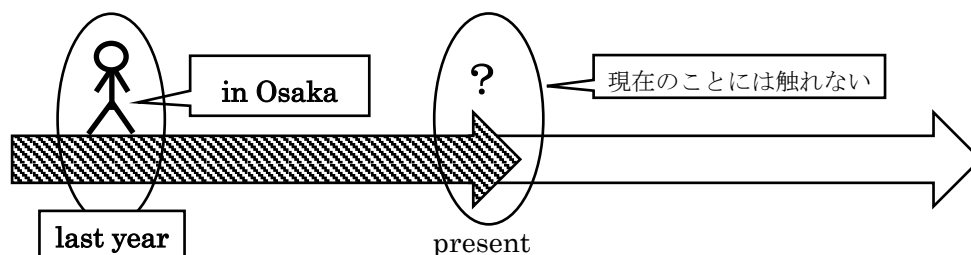
4文目は3文目とダッシュ（—）で結ばれていますが、これは2つの文に強い連関があることを示唆するためでしょう。ダッシュの前後には「**抽象**」—「**具体**」の関係が成り立っていることが多いですが、この文の場合は3文目で述べた内容を補足するものになっています。4文目は文法的には形式主語構文が用いられているのが目立ちますが、もう1つ、ここまで動詞が現在形ないし現在完了形だったのが一転して過去形になっていることにも注意しましょう。というのも、過去形の文は現在（正確には Wittgenstein がこの文章を執筆している時点）とは異なる考えを表明していることを示唆しているからです。

【過去を表す文の基本イメージ】

...過去形の文は過去のことのみを表すので、現在において成り立たない事柄を述べている場合がある。

例外あり（仮定法など）

ex. I lived in Osaka last year. のイメージ



このニュアンスを日本語で表現しろと言われると非常に難しいですが、上述のニュアンスは是非読み取れるようになって欲しいと思います。

【第1パラグラフ4文目 和訳例】

私が当初意図したのは、この注記すべてをひとまとめにし、今とは別の機会に、今とは異なる形で思い描いていた構成の本にすることだった。

これを読んだ時点で、Wittgenstein はもはやこの意図を放棄していて、当初の構想とは異なる本が出来上がろうとしていることを察することができれば、まずまずの読解力が身についていると言って差し支えないでしょう。

強者の戦略

【第1パラグラフ5文目】

But the essential thing was that the thoughts should proceed from one subject to another in a natural order and without breaks.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

この文が第2文型であることはすぐに分かったとして、CVSの倒置になっていることには気付いたでしょうか？教科書的に説明するならば補語の“the essential thing”に比べて主語のthat節があまりに長いので倒置が生じたということなのでしょうが、CVSの倒置形にすることで後置された主語が強調されるという説明の方が、倒置を見つけた時に「ということは重要情報か！」とテンションが上がるのでオススメです。

【第1パラグラフ5文目 和訳例】

しかし、その思索がある主題から別の主題へと、自然な順序で、そして途切れることなく進んでゆくことこそが本質的なことだった。

和訳の際にはCVSの順番通りに訳してもSVCの語順に戻して訳しても問題ないと思いますが、和訳例では倒置による強調の効果をアピールするために係助詞の「こそ」を追加しています。

以上を踏まえて第1パラグラフを概観してみると、*Philosophical Investigation* (『哲学探究』)の原稿執筆が徒然なるままに行われていたことが読み取れます。どうやら、本書は主題が据えられてトップダウン式に論考が組み上げられたのではなく、彼が思いつくまま思考を巡らせたために主題が多岐にわたっていて、しかもそれが後で再構成することなくそのままの順序で掲載されているようです(Wittgensteinの言葉を鵜呑みにすれば、の話ですが)。

次回は、第2パラグラフの内容を見てゆきたいと思います。